

いでましの記

千駄が谷なるなにがし侯の邸に、東宮の行啓あり。キオリンピアノ
きこしめすべきよし仰言ありとて、キオリンの君にともなはれて、
ゆくべく定まりぬ。わが國のキオリンといへば、誰もみな此君と人
のたゞふる君に、こはあまりなるピアノぞ伴奏せらるゝよと、誰も
誰も思ふなるべし。殊にはいととみの事にて、思ふまゝの下ざらへ
もならざりつるぞ心細き。今更に才なき身をはかなめど、せんすべ
もなしや。

いでましの御車、道のほとりにをがみつる事は折々ありつれど、御
前にいでんは、はじめてなり。例の物おぢする心よ、今日ばかりは
靜にあれと思ひつゝ、晝頃より行く。六月半の空とて、白き雲は折
々日をさへたれど、猶いと暑けきに、遠き道の程を車にゆられてゆ
く。人のゆきゝやうく、稀になりて、若葉さしたる並木道に入りぬ。
かの邸や近くなりけん、田舎めきたる家居續くあたり、いでましを
拜せんとにや、此處にそこに五人六人づつ立ち居たり。到り着きぬ
れば多くの人たち早く來つどひて、かにかくといひ騒げり。西洋の
間二つあけ放ちて、御座志つらひたり。ピアノは、其間の白き壁の
もとにぞ置かれたる。あまりに御座け近しと思へども、いかゞはせ
ん。廣き世にたゞ我が語らひ人なるピアノよ、今日の我が業を助け
てよと、ひそかに念じつ。

御車いまといふに、立ち重なりたる人のかげより拜すれば、黒き軍
服めさせ給へる。東宮、某の宮、同じく武裝したる供奉の人々と共
に入らせ給ひぬ。

こなたの室に、キオリンの君、調子など試み給ふほど、武官長の君

來まして、曲の名を聞江あぐべき旨、仰言ありと傳ふ。我等ははかなきすさびに、さは御心とめ給ふ事とかしこみて、弁オリンの曲はファンタシア。マドリガール。ベルベトゥウム、モビレ。ピアノは、アンプロムプツとかきて奉る。

御前にいでぬ。主人の夫人の君、こは誰々と、我等が名を聞え上ぐれば、一々御いらへあり。畏しとも畏しや。かの曲ども奏し終へて、次に志ぞく。猶何とかいひけん臺灣人が詩吟など聞し召たり。

こなたの廊下には、ところ狭きまで人集ひたる、其まぎれに立居たるに、只今の西洋樂、いたく大御心にかなひぬる由のたまはせつるを傳ふべく、そここゝ求めたりとて、例の武官長來ましたり。

主人、主人は何をしてか見せんとする、何にてもあれ今日は主人みづからの技を見せよ、との御聲す。そと打覗けば、主人の候いたくかしこみて、いで日頃我自らのごといとほしみ侍る卒どもが、劍の舞をかなでさせ候はん、志ばし庭におりたゝせ給はなんと聞えあぐ。いとよう逃げたりやと、笑はせ給ひて立ちいで給ふ。人々もゆかしがりて、我もくゝと御供す。

廣き園生のかたへには、たけ高きさうび今を盛と咲き亂れて、其かをり身にしむばかりなり。芝生をかぎる木立、涼しき風の調をかなづるに、こなたの大きな常磐木のかげに、かりそめの御座あり。殿下は、某の宮と、其處におはしまして、劍舞軍樂隊など見しなはず。みけしきいとうるはしう、見奉る人々の心のうちも、いひしらず樂しげなり。水色、空色、紫などの、思ひくゝの衣に、美しう裝ほひ給へる若き娘たちは、赤き白き心々の扇をさしかざりつゝ、水蔭をもとめて、花のひまを見江隠れする、まことに晝にあるやうな

り。

四時の頃、還御ましくぬ。はやう歸り路につく人もあり。われらは猶庭に遊びなどしつ。

伴奏はオオリンにのみと思へば、遊びにもし給ふはいかに、アンプロムツとは、み國にはいかに譯するにやと、思ひかけず聲かけ給ふは、ドクトルベルツの君。その答はオオリンの君にこひまつりて、志ばし花の繁みに入りぬ。黄なると白きと赤きと、大きなると小きと皆おもふどちにや、吹く風に同じやうにうなづきあひつゝ、かたみに薰りあひたり。もし我蝴蝶とならば、いづれの花にか宿からんと、一つく花の顔さし覗けば、皆やさしげに笑みつゝ迎ふるやうに覺ゆ。などさる所には隠れ給ふ、花との御物語、われにも聽かせ給へと、うしろより聲かけ給ふ君あるに驚けば、御名世にかくれ無き大將の君なり。あまりに長くさる處に一人にて居給ふな、花の精にや惑はされむ、あなたの群に入り給へ、面白き事見せんとのたまふ。かなたには、夫人たち、オオリンの君と何か語り居給へり。其もとに行きぬ。大將の君は、かねていひつけ置き給ひしにやあらむ、若き人十人ばかりかたへに居たるに、そと手をあげて、何にかあらむ、下知し給ふと見れば、何心もなくかなたに居給ふ主人の侯のもとに、其人たちの馳せ行くと思ふほど、はやく主人の君の御身は、空に高くさし擧げられたり。こは胴上げとかやいふ事をし給ふよ。折しも樂隊はマーチを奏しいでたるに、大きな君をさしあげつゝ、ゆらくと拍子あはせて練りありく。姫たちは手をうちてをかしがり給ふ。やがており給ひし侯、只今の參謀は君にやおはする、いざこの度は君をとて追ひかけ給ふを、大將はいととう逃げ給へ

り。陸海軍の御あらそひ、いとめざましうと、人たち興がるに、思ひかけずかたへより、伯父君たちはおに遊びをやし給ふ、我等をも加へさせ給へと、をさなき姫たちまつはり給ふに、ゆくりなくも休戦となりぬ。

おもしろき事は未だつきぬに、夕暮の風すゞしう吹きいでて、力無げなる日の光いよゝうすれゆく。人々みな、馬に車に、おのがじしのどやかなる心を乗せて、おのが家路にむかひぬ。(明治三十一年六月十日)

【入力者注】

底本に行をあわせるために、句読点のサイズを小さくしたり半角スペースを挿入した個所があります。

底本…佐々木信綱編「竹柏園集第貳編」

明治三十五(1902)年五月廿七日発行

入力…小林 徹

公開…令和四(2022)年四月二十三日

改訂…令和四(2022)年九月十三日

橘糸重【[散文作品集](#)】に戻る。